

# 論文内容要約

## 論文題目

### Prevention of atrial fibrillation recurrence with low-dose landiolol after radiofrequency catheter ablation

(低用量ランジオロールによる心房細動カテーテルアブレーション後の再発抑制効果)

責任講座： 内科学第一講座  
氏 名： 石垣 大輔

#### 【要約】

**目的：**心房細動の根治治療としてカテーテルアブレーションが有用であるが、術後の心臓自律神経機能の変化や炎症により、急性期再発が起きることが少なくない。急性期再発により、術後管理に難渋することがある。心房細動に対するカテーテルアブレーション後の急性期再発は術後特に3日間が最も多い。今回我々は、超短時間作用型静脈注射用B遮断薬「ランジオロール」が、心房細動に対するカテーテルアブレーション後3日間の再発を抑制できるかどうかについて検討した。

**方法：**カテーテルアブレーションやランジオロールによる重篤な副作用はみられなかった。発作性心房細動患者連続50症例を、無作為にランジオロール群、プラセボ群に、1:1の割合で割り付けた。カテーテルアブレーション後3日間、ランジオロール群ではランジオロールを0.5 µg/kg/minの速度で持続静脈注射し、プラセボ群では生理食塩液を持続静脈注射した。入院中常に心電図モニターを装着し、カテーテルアブレーション後3日間の心房細動再発の有無を調べた。心房細動再発は5分以上持続する心房細動または心房頻拍と定義した。

**結果：**患者の平均年齢は58±9歳、男が39例、女が11例であった。B型ナトリウム利尿ペプチドはプラセボ群に比べランジオロール群でやや高値であった(ランジオロール群37 [22-66] pg/ml、プラセボ群25 [14-48] pg/ml、 $p=0.048$ )。その他の患者背景は両群で有意差はみられなかった。カテーテルアブレーション後3日間の心房細動再発は、プラセボ群に比べ、ランジオロール群で有意に少なかった(ランジオロール群25例中4例(16%)、プラセボ群25例中12例(48%)、 $p=0.015$ )。術後3日間の心拍数変化はプラセボ群に比べランジオロール群で小さくなる傾向があったが、血圧変化及び体温変化は両群で有意差はみられなかった。ロジスティック回帰分析による多変量解析では、ランジオロール投与は、カテーテルアブレーション後3日間の再発抑制についての唯一の独立した予測因子であった(オッズ比:0.178;95%信頼区間0.044-0.724; $p=0.016$ )。

**結論：**心房細動カテーテルアブレーション後の低用量ランジオロールの予防的投与は心房細動後の急性期再発を安全に抑制できる可能性がある。